

表1 グリホサート系除草剤体系処理におけるTY更新草地2年目秋の牧草率¹⁾

草種	1刈後体系 ²⁾			秋夏体系 ³⁾			対照区 ⁴⁾		
	根刈	天北	畜試	根刈	天北	畜試	根刈	天北	畜試
TY	94	100	97	91	86	68	87	69	6
RCG+QG	4	0	2	0	12	22	7	29	85
他	2	0	1	9	2	10	6	2	9

処理時期
 前植生処理⁵⁾ 7/中 7/下 7/中 9/下 9/下 10/下 - - 10/下
 播種床造成⁶⁾ 8/上 8/上 7/中 6/中 5/下 5/下 6/中 6/上 6/上
 播種床処理 9/中 9/上 9/上 8/上 7/下 7/上 8/上 8/上 -

1) 牧草率は冠部被度または裸地を除く基部被度。TY90%以上の数値をグレー反転で示した。試験開始前のRCG+QG冠部被度は根刈と畜試で73%、天北で64%であった。
 2) 播種当年1番草刈取後の前植生処理と表層攪拌後の播種床処理
 3) 播種前年秋の前植生処理、当年春の表層攪拌および夏の播種床処理
 4) 根刈および天北は播種当年1番草刈取後表層攪拌を行い、播種床処理、畜試は播種前年秋処理に翌春の表層攪拌後に播種
 5) 秋夏体系と畜試対照区は播種前年、他は当年 6) ロータリーハローによる

表2 グリホサート系除草剤処理時草丈とその後の再生(本/m²)

草丈設定 ¹⁾ cm	QG		RCG
	夏処理 ²⁾⁴⁾	秋処理 ³⁾⁴⁾	夏処理(500ml) ⁵⁾
20	-	5.5	-
30	6.9	4.0	-
40	3.5	0.8	0.63
50	3.9	1.0	-
60	-	-	0.13

1) 実際の草丈は若干前後する。QG、RCGいずれもほぼ純群落での試験。処理前QG茎数は2000本~3000本/m²程度
 2) 1番草刈り後暦日を変えて処理。19日後調査。 3) 2番草刈り月日をずらし、一斉処理。48日後調査。 4) 10aあたり500mlと1000mlの2水準の処理区平均 5) 1番草刈り後暦日をずらして処理。翌春調査。

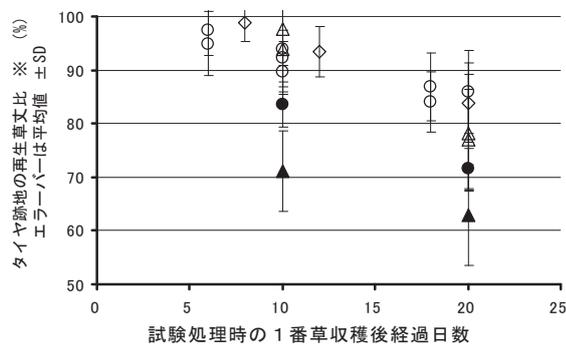


図1 1番草刈取後のスラリー散布時期がタイヤ跡地の2番草草丈に及ぼす影響

※タイヤ跡地以外の場所の再生草丈に対する、タイヤ跡地の再生草丈の割合
 凡例 △：根刈1年目，○：根刈2年目，◇：根刈3年目，▲：天北1年目，●：天北4年目

表3 地下茎型イネ科草種に対応したチモシー採草地の植生改善指針

更新方法 ⁴⁾	播種	主要雑草	前年8月		前年9月		5月		6月		7月		8月		9月	
			中旬	中旬	下旬	中旬	下旬	中旬	下旬	中旬	下旬	中旬	下旬	中旬	下旬	中旬
更新方法 ⁴⁾	除草剤処理当年	RCG, QG単独またはRCG+QG						1番草刈			前植生処理 ¹⁾ 散布時草丈: QG40-50cm RCG60cm以下 ²⁾³⁾	播種床造成・鎮圧 ³⁾⁴⁾	30日以上あけること			播種床処理 ¹⁾
		RCGがなく、かつQG再生が遅い場合										前植生処理 ¹⁾ 散布時草丈 QG40-50cm			10日以上経過後 砕土・播種・鎮圧 ⁴⁾⁵⁾	
更新方法 ⁴⁾	除草剤処理翌年	RCG QG共通	2番草刈	前植生処理 ¹⁾ 草丈40cm程度	播種床造成・鎮圧 ⁴⁾ (鎮圧後の雑草過繁茂を避けるため、6月下旬までの範囲で出来るだけ遅らせる。)						30日程度あけること			播種床処理 ¹⁾⁵⁾⁶⁾ (7月中は避ける。)		
維持管理	施肥管理	牧草率の極端な低下を避けるため、スラリー等の糞尿処理物の過剰な散布を避け、土壌分析値に基づく施肥管理を行うことが重要。														
維持管理	スラリーの散布時期	播種当年から翌年1番草刈取後までの散布はさける。利用2年目以降、早春は5月中旬までに散布し、再生草への散布は前番草刈取後10日以内とする。														
地域単位の取り組み	参画・構成	自給粗飼料の有効活用による経営安定														
	酪農組合・農家、JA、役場、公的支援機関(普及センター・試験場)、公社、民間種苗、資材会社等	<p>聞き取り等基礎調査 → 現状と課題 → 農場台帳・土地利用計画表の作成・整理 → 自給飼料計算シート作成・整理 → 改善目的・到達目標設定(将来計画) → 植生改善のための「5step」による実行手段の検討 → 更新に向けた生産性のレベルアップ</p> <p>植生調査・診断 土壌診断(物理性・化学性) → 粗飼料分析</p> <p>Step1 自給飼料の状況 Step2 農場の所有状況 Step3 改善後の利用状況 Step4 改善に求めるもの Step5 改善程度(満足度)</p> <p>基本技術改善 → 難易度区分による改善手段の最終選択(工法・草種・費用) → 施工</p> <p>技術内容については地域版マニュアルで整理</p>														

注1) グリホサート系除草剤。薬量は対象雑草・時期に合わせて、北海道農作物病害虫・雑草防除ガイドの薬量を遵守する。
 2) 除草剤の散布ムラや気象条件等による不十分な薬効を認めた場合は速やかに2回目の茎葉処理を行う。
 3) 1番草後の除草剤散布後に枯れ草が多い場合は、搬出または(チョップ)等で粉碎する。
 4) 前植生がRCGおよびQG優占草地への作清法によるTY播種は、翌年秋の段階で定量的にTY90%にすることが難しい。
 5) 晩秋にチフェンスルブロンメチル剤の使用が想定される場合はクローバ類を導入しない。
 6) 少なくとも前年にRCGに種子を生産させないような管理が重要。

詳しい内容については、次にお問い合わせ下さい。
 道総研畜産試験場 基盤研究部 グループ 出口健三郎
 電話 (0156) 64-0621 FAX (0156) 64-6151
 E-mail: deguchi-kenzaburo@hro.or.jp